Osaka University Knowledge Archive

Title	(海外報告)優雅な腐敗
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1980, 19, p. 122-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53752
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

（海外報告）

優雅な腐敗

向井正也

「アルノ河畔」

この春ひさしぶりに中央ヨーロッパをクルマで思うざま駆け廻って来ました。「牛に牽かれて……」のタトエよろしく，老骨に鞭打って，研究室の連中の「建築巡礼」に文字どおり便乗したわけです。クルマは白塗りプジョー504，前部の天井がスライドして，「何でも見てやろう」というドン欲な調査アニマルたちの望を十分かなえてくれました。日本にはあまり馴染みのないフランスのクルマですが，何ともまあよく走りました。一ヶ月あまりの短期間に，しめて一万二千キロ。ほぼ赤道全周の三分の一に当ります。

帰来既に四ヶ月，いまさら海外報告でもあるまいとは思うのですが，編集子に御約束した手前，かなり鮮度はおちますが，すこしお耳を拝借いたします。

まず，ロンドン・ヒースロー空港で，一行の荷物がいつまでたっても出て来ないという，ささやかなイベントがありました。しびれを切らしていきり立つ乗客の前で，うろうろ，おたおたする従業員たちの姿に，一行の誰かが，「英国病かも」とひと言いったのをおぼえています。

でも，こうした人間のグータラぶりとはウラハラに，空港そのもののデザインは全体から部分のすみずみまで，キビキビとしていて爽快で，「成田」などとは，むしろかなり差があるように私には感じられました。

英国病の兆候は，ロンドンの裏町，たとえばイギリスの現代建築の先端を行く，小学校や集合住宅で，世界の注目を集めたピムリコ地区でも明らかに看取されました。建物のデザインが尖鋭で新鮮であればある程，それをとりまく街の乱雑さや不潔さが一そうきわ立って来るというわけです。

そうした病める英国の実体を最も端的に示していたのは，やはりここの裏町フォルニア街にある，バロックの巨匠ホークスムアの名作「キリスト教会」の見るも無残な荒廃の姿でした。日本でなら，重文級の建物の，こうした惨状は到底考えられぬことでしょう。でもこうした例はロンドンを離れてスコットランドへと北上する途中にも，散見されました。聖堂のＳＯＳを訴え，喜捨を求めるポスターやパンフレットが，各所で見られました。ところがそうした道中，

われわれがクルマをとばす当の高速道路の方は何ともまあすばらしい出事栄えでした。上記ヒースローの爽快さは，そのまま高速道路に沿うて，イギリスの全国各地に四通八達しているのは驚きです。

わが国の高速道路には，こうした徹底さ，本格派ぶりはとうてい見られません。何となく場当り的なチャチなやり方が目につくわけです。それにしても日本のクルマ関係のデザイン一般の，どうしてああも卑俗で下司ばっていることでしょう。同じ対象についてのイギリス，さらにはヨーロッパのデザインの格調の高さに，デザイン以前のいわば文化的コンテクスのちがいのようなものにつくづく劣等感をおぼえました。

ところがその半面，われわれはイギリス，更にはＥＣ諸国に，「イギリス病」或は「ヨーロッパ病」などというよび名で，妙な優越感をもつに至っております。もはや産業技術では西欧に追いつき追いこし，ＧＮＰではアメリカを除いてトップの座を確保しつづける事実は，日本企業のヨーロッパへの大挙進出として，何よりも，前には見られなかった高速道路沿いの各社のカンバン類に示されているですが，あまり大がかりな広告を好まぬ西欧の企業をしりめに，あたかも日の丸を到るところにおっ立てているかの観があります。このことで，私は，オランダの高速道路を走行中，ほかに何一つ広告とてないフランドルの美いランドスケープを圧して，“ＳＯＮＹ”と一きわアザヤカに白光を放つ巨大なネオン塔が，強く印象にのこっています。

ロンドンに滞在中は，御存じ当地特有のグレイの日々でした。その寒々とした霖雨の半日を，ビクトリア・アンド・アルバート美術館に出かけましたが，美術工芸関係のミュジアムとしてのその世界的な盛名から期待したほどではなく失望しました。成程すばらしい名品もあるにはありましたが，展示品は玉石混こうで今一つ洗練度に欠ける思いでした。日本の仏象や釣鐘など東洋美術のガラクタが中庭で雨打たしになっている図など，この印象を強めるのに役立ったようです。

折しもここでは現代日本の造形文化をありのまま展示介するとのフレコミで，「ジャパン・スタイル展」なるものが開かれており，なかなかの盛況のようでしたが，私は会場入口で様子をうかがっただけで入る気にはなれませんでした。この展覧会の中味とは，要するところ，今日西欧市場を席捲しつつある日本企業の手になる工業生産品と，これに色どりをそえる「フジヤマ・ゲイシャ」的な，あの一連の日本特有の土俗的造形――「キッチュ」のオンパレードのたぐいだとすぐわかったからです。

事実，後で知ったことですが，この展覧会は先方の有識者の，かなりのヒンシュクを買い，手酷しい批判をうけたようです。同展の意図が文化的な啓蒙活動というよりは商業的な売りこみにあると見られたからです。

ここでも示されたように，日本は今日工業製品におけるデザイン面では世界の水準を抜くまでに成長したことは，丹下や黒川など，建築デザインなどと同様ですが，それはあくまで単体としてのデザインであり，群としての都市や生活環境の複合的なデザインでは，まだまだ東南アジア諸国なみに，後進国として止っている現実はいかんともしがたく，まことにもどかしい気がいたします。

今度の旅で，ヨーロッパの各地で，美しいというよりはむしろアメニテイに富んだすぐれた都市景観に接するたびごとに，たえずこの思いに駆られましたが，こういう面からも日本のデザインのあり方は，80年代に入った今日，新しいアイデンティティを求めて根本から問い直すべき時期に来でいるように私には思われるのです。

（神戸大学）